

別添審議結果

1 目指すまちの状態と取り組みの考え方・課題

関係人

若い世代のやりたいことやチャレンジを後押しするまちであると良い。チャレンジを後押しする行政の具体的な仕組みがあるなど、挑戦する人を応援するまちであると、大学進学や就職を機に長崎を出たとしても、戻ってきたいという気持ちが生まれるのではないかな。

関係人

子育て世代にどのようなまちになると良いか意見を聞くと、子育て世代がゆっくりできる場所や徒歩圏内に大きな公園があると良い、中高生にも遊ぶ場所が必要、長崎駅から夢彩都や水辺の森公園方面の海沿いの道をお店などを楽しみながら歩ける環境があれば良いという意見があった。

また、諫早市にある「たらみ図書館」は、図書の目的だけでなく、自由に使える自習室や子どもが作った恐竜のオブジェが置いてあり、子どもの存在を多く感じられる場所となっている。

このように、1つの目的だけでなく様々な用途を掛け合わせる場所とすることで、より多くの人が集まり、子育てもしやすい住み良いまちになるのではないかな。

事務局

若者が楽しむ場所をつくるだけでなく、活動がしやすい空間をつくっていくことが大事であると感じた。

また、世代を超えて人が集まる場をつくることで新たなコミュニティが生まれるため、地域に合ったコミュニティは何かを原点に置きながら検討したい。

委員

お手元に配布した「タウンライブラリー」について説明する。これは都心部の岬のエリアのオーラルヒストリーであり、そこで生活を営んでいる人たちの記憶を掘り起こしながらまとめたものである。

この取り組みにより、そこに住んでいる人が自分たちのまちを改めて見直すことができる。本委員会でも、現状分析や今後の課題を検討する上でこういう手法も1つのヒントとして取り上げていただけると良い。

委員長

ヨーロッパのある人口減少地域では、ナラティブ（物語）を重要視し、それを基にまちづくりを議論していることを伺った。

そうした取り組みと、今紹介いただいたオーラルヒストリーによるまちの歴史の掘り起

こしが関連すると思い伺っていた。

委員

課題感に関する認識と課題感を踏まえた上でグランドデザインの守備範囲について確認したい。

まず、課題感に関する認識である。仕事が無いことを理由に転出者が増加している状況は、基本的に、全国共通であるものと理解しているが、まちづくり計画は、産業政策は守備範囲ではない印象がある。

今回、経済再生・定住人口増加とテーマが大きいため、どのくらいの課題に対して解決しようとしているのか。また、全国自治体から人口減少の相談を受ける中で、出会いの場が無い、結婚ができないという理由も多く、交流の場をつくるだけでなく、より積極的な手立ても必要かと思う。課題と対応策を深堀する余地があるのではないかと考える。

こうした産業政策やソフト事業的な取り組みを、今回の議論から外すのかどうか、グランドデザインの守備範囲を確認したい。

事務局

このグランドデザインでは、例えば、検討の枠組みの中に土地利用という切り口を掲げている。マッチングについては、別途策定した少子化対策プロジェクトアクションプランで掲げており、グランドデザインでは、アクションプランの取り組みも含め、空間に落とし込むといった空間活用の仕方や活動量を増やすことなどについて、ご意見をいただきたいと考えている。

委員

基本的に土地利用の範囲で議論するものと理解した。また、マッチングについても、グランドデザインにおいては、まちづくりの観点から言及していくものと理解した。

仕事やマッチングをつくっていくうえで、資料中では「交流」という言葉で整理されている印象があるが、昨今のまちづくりや建築計画では、出会いを意図的につくることが重要であると考えている。交流という言葉だけではなく、都市の構造に踏み込んだ表現とし、出会いを意図的につくることができるまちの構造となれば良い。

委員

企業誘致を含めまちづくりはマスタープラン通りでできる時代ではない。企業誘致が成功した時にグランドデザイン上でも、それを活かせる余地を残しておくことが大事である。

これからのまちづくりでは、戦略的に若い人やチャレンジする人を集め、そのような人と地元の企業や人との交流の場を仕掛け、まちを魅力的に変えていくようなことをしなければ上手くいかない。そのような場を通じ、まちを面白くしていくようなことを重点的に仕掛

ける活性化していくと思う。議論のポイントをそうしたところを中心にできると良い。

事務局

アプローチの仕方は非常に大事なポイントと考えている。これからは、新しく投資してモノを増やしていくというよりかは、長崎ならではの、人をひきつける価値が高いまちを目指すことに主眼を置きご意見をいただければと考えている。

委員

37ページに掲げる課題はどの地方都市にも基本的には共通する内容と認識しており、長崎のまちが本来持っている体質や風土にどう切り込んでいくかが大事ではないか。これまで長崎のまちが培ってきた体質や風土、人の性格などソフト的なものも理解した上でこうした課題に取り組むことが重要である。

委員

前委員会に参加していないため、どういうレベル感で発言すれば良いか分からないが、長崎市で経済再生を目指したまちづくりを考えると、一番のキーワードは観光であり、いかに観光を活性化させるかということであると思う。

一方、人材不足が大きな問題である中、観光事業起こしたいが人材がいない状況であるため、すぐには難しいがホテルに関する学校や観光に関する学校を誘致できれば、学生も来るし、観光業の人材も生まれるのではないかと。

事務局

様々なご意見がある中で、まちづくりの方向性としてどこまで落とし込めるかという整理の必要はあるが、幅広く、長崎の強みを活かしたご意見をいただきたい。

このグランドデザインは、2050年を目標年次とするものであるため、理念的にならざるを得ない部分もあるが、早急に取り組むべきものは、リーディングプロジェクトとしてすぐに動き出せるよう頭出しをしたい。

先ほど、ここに書かれている課題は、全国共通のものであるとご意見をいただいたが、これを長崎に落とし込んだときにどうなるか方向性を付け、取り組みを整理していく考えである。

委員

グランドデザインに関しては具体的な方策というよりも、様々な分野で今後考えられることを出していくという理解でよいのか。

事務局

基本的にはそのような考え方であるが、例えば、企業誘致であると経済再生・少子化対策

プロジェクトアクションプランで頭出しされているため、それをグランドデザインでは土地利用の観点から空間に落とし込むことが目的となる。

それは、いわゆる基盤づくりで、もうひとつ大きな柱として仕組みづくりを設けている。

ただ、基盤をつくるだけではなく、そこで活動する方々がしっかりそこを利用でき、そこで出会いが起きて、活動量が増えていくようなことを目指していきたい。基盤づくりと同時に人や組織といった仕組みづくりも考えていきたい。

委員

どのくらいの抽象度で議論すればよいか判断が難しく、最終的にグランドデザインのアウトプットがどこを見据えているのかイメージが付きづらい。

例えば、このエリアでは新しい取り組みや技術を取り込んで実証する場とするなど、特区のようなものをつくるアウトプットをイメージしているのか。

事務局

アウトプットのレベル感については、これからの検討になるが、例えば、チャレンジできる環境づくりという大きな方向性を掲げ、その中で具体化できるところについては、リーディングプロジェクトを打ち出すというように、階層別に整理するイメージを持っている。

委員

経済再生の観点から意見を申し上げる。まず、柱となるのは、賃上げと値上げで、長崎は物価に対して賃金が安く、それを理由に若者が転出している事実は否めない。

賃上げ・値上げを実現していくために、インバウンド、特に富裕層向けのサービスに力を入れ、外貨を得ていくことが、経済再生の一つの基盤となるのではないかと。そうした中、まちなかには、まちなかの踊り町が基盤となり形成されている組織の「長崎くんち」という伝統的なお祭りがあるが、後継者問題や資金不足により継続が課題となっている。外国の方々は、日本や長崎の歴史・文化に興味を持たれているため、そこに対してのお金の使い方、さらには富裕層の方々に展開していければ、長崎くんちの歴史も続くし、雇用や賃上げ、値上げを全体的に底上げできるのではないかと。そうした成功のモデルケースをつくり、様々な地域に横展開できれば、経済再生につながるのではないかと考える。

委員

36ページにある「民間活力や既存ストックを最大限活用すること」について、人にやさしいまちづくりの観点から意見を申し上げる。

長崎の住宅環境は、平地は土地価格が高く、離れたところに居住が広がってきた状況があるため、平地や斜面地にある住宅ストックの把握・分析に取り組み、どのようにストックを活用していくかを早急に取り組まないと、住宅環境による転出は対応できないのではない

か。

また、住宅セーフティーネットとして、住宅確保要配慮者が必要な支援を受けられる仕組みがあるが、長崎ではそうした方に対して居住支援をしていく協議会が立ち上がらない。そうした取り組みも早急に進めつつ、公営住宅のバリアフリー化や不動産会社とも情報共有するなどし、平地の住宅ストック活用や斜面地の高齢者の手当をするという視点もグランドデザインを考えていくうえで重要ではないか。人にやさしいまちづくりはスマートシティの観点と合わせて考えて欲しい。

もう1点が、外国人の方についてである。人口減少は先進諸国の課題であるが、人口爆発して困っている国もあり、そことの連携が考えられる。そうした国から人口を受け入れていく仕組みづくりをし、インバウンド人材の育成や長崎に就職して暮らしてもらうなど、グローバルな視点を持ち検討を進められれば良い。

事務局

長崎くんちというお祭りが地域コミュニティを形成していることは、長崎の大きなオリジナリティであると思っている。長崎くんちの三が日だけでなく、稽古や庭先回りの風景も含め、まちを訪れたくなるコンテンツとして引き出していくことが、訪れたくなるまちとなる1つのヒントになるように感じた。

人口減少により住宅も含め基盤が空いてくるため、色々な活用のしやすさをつくってきたい。例えば、住宅用途でしか利用できない用途地域でも、テレワーク拠点となるような場所やお店が立地できる環境をつくるなど地域のセーフティーネットのような観点で検討できればと考えている。生産年齢人口を確保するための外国人の受け入れについても、まちづくりの視点からどういうアプローチがあるか考えていきたい。

委員

斜面地では、車が通らない場所に空き家が増加しており、空き家活用にも限界がある。道路整備を大掛かりに取り組まないと、空き家問題の解決に繋がらないのではないかと。

また、諫早市では都市計画の線引き制度の廃止が検討されており、今後、開発が進むことが想定される。長崎市に比べ地価も安いと、人が流れていく可能性が高く、長崎市も都市計画自体を根本的に見直す必要があるのではないかと。

委員

長崎くんちはもちろん様々な行事や景色、まちなみ、文化など、そうしたものをどこまで守れるかをベースにおいて、このグランドデザインを検討していくべきと考える。

それを守りながら、外国人の方も受け入れていかないといけないし、障害者の方も楽しく安全に暮らせるまちにしていけないといけない。そうした考え方のコンセプトをきちんと整理したうえで、様々な手法の議論をしていくべきではないかと。

委員

まず、人と自家用車との関係性を今一度見直していくべきでないかと感じた。長崎市で生涯住み続けられるかどうかという不安を感じる中には、配偶者の問題もあるが、日々暮らしていくうえで付き合っていける方々に出会えるかどうかという点もあると思う。そのためには、いかに自家用車以外の方法で人の流れを回し、出会いをつくっていくかということになり、その点、長崎市街地は非常に親和性があるのではないかと考える。そうした観点で考えたときに、将来の過ごし方のイメージは、「移動」という書き方で留まっている。資料中に「回遊」という記載もあるため、今一度まちなかの回遊軸を見直し、観光客も含め自家用車以外でまちなかを回遊して楽しんでもらい、併せてチャレンジできる場の確保や、ほこみちなど道路等の規制緩和も含めて議論できると良い。また、長崎くんちの三が日の賑わいを、例えば、毎月1回、各町で回せるような仕組みがあると良いのではないか。まちなかで人の回遊や交流を捻出するような仕組みがあると長崎独自の魅力になるのではないか。

次に、斜面地でも様々な場所があり、場所によっては、行きは自宅から坂道を下り、帰りはバスに乗って自宅上まで行って坂道を下って帰る、というように一度も坂を上らなくて済む場所とそうでない場所に2分化できると考えている。また、斜面地は車が入ってこない静謐な場所であり、子育て世代に魅力的な側面もある。

長崎はまちなかから斜面地、郊外地まであり、ライフステージに応じて住む場所を変えていくということも考えられる。そのためには、郊外部のバスの減便などのリスクヘッジとライフステージに合わせた住まいをコーディネートする担い手確保が必要と考える。

最後に、長崎を出ていく方を嘆くより、出て行った方に帰って来てもらうような魅力を高めること大事ではないか。出て行った方は二度と帰ってこないわけではなく、帰ってきたいと思う方もいるし、逆に市外から長崎に魅力を感じて来られる方もいる。長崎に住んでみたい、住み続けたい、戻って来たいという人を1人でも増やしていく、社会減と増を切り離して考えるとまちとして新たな視点が得られるのではないか。

委員

現在の資料は漠然としすぎている印象であるため、どういった住まい方を狙っていくのか、稼ぎ方の観点としてどういう産業を狙っていくのかなど、もう少し具体性を持たせた記述であった方がよいのではないか。

1点目、住まい方を考える際には、各エリアが持つポテンシャルをしっかりと解釈して示すことが大事だと考える。2050年まで続く、骨格となるようなポテンシャルを引き出し、書いてみてほしい。ポテンシャルを活かした場所づくりができると、それは価値になる。場所の価値が高まれば、お金を払ってでもここに居たいという気持ちが働くことにつながり、地価の安い方へと安易にスプロールしていくことが抑制されるのではないか。

2点目は、稼ぎ方について。長崎の観光は、長崎くんちの様に生活文化と密接につながっていることが特徴であると思う。観光から暮らしまでがグラデーションでつながっている

ことは、他の都市にはない特徴で、そこにチャンスがあるように感じる。チャレンジというお話もあったが、若い人がベンチャーで挑戦して小さな商いを生むようなことが、観光と暮らしがつながる文脈の中だとやりやすかったりするのではないか。観光と暮らしの間には、文化やクリエイティブなどがはまりやすい。それらをテーマとしたまちづくりや商いが生まれるように導いていくことが、長崎には向いているのではないか。

3点目は、グリーンインフラについて。海外では、気候変動への対応に向けて、また都市に緑陰をつくり、微気候を快適にすることで猛暑の中でもまちなかの経済活動が止まらないようにすることへ向けて、緑を積極的に増やす取り組みが進んでいるが、日本ではあまり進んでいない。人口が減ることは空地ができることでもあるため、そこに上手く緑を入れていくという試みを考えても良いのではないか。斜面地の使いにくいところは徐々にシュリンクを考えていく必要があるため、そうした土地をどう山に帰すかもセットに考えていければ良い。

4点目は、これらの進め方について。行政が全てを進めることは困難で、民間の力を多く借りる必要がある。民間が事業として参入できるような仕組みや行政による制度緩和、検証コストの行政による負担などが必要になると考える。

最後に、このグランドデザインは2050年を目標とする計画であり、不確実な社会に突入していく中で議論しているため、今考えていることが間違っていたということもあり得る。それに備えきちんとデータを取りながら検証し、ハンドリングして進めていく必要がある。そうした観点でいくと公・民だけでなく、学も入れ、公・民・学で専門的見地からのデータに基づく評価を入れながら進めてはどうか。

委員長

意見を拝聴していてキーワードになりそうと感じたところを述べる。

1点目は、11ページの目指すまちの状態の文中にある「長崎独自」という点である。ここが無くなると他のどの都市でも当てはまる内容になってしまうため、長崎らしさが何なのかを議論していくことが大事な点であると考ええる。

2点目は、ストック活用や新しいものをつくり出すことが戦略的にできるまちという点である。関係人からチャレンジができるまちや生み出すまち、子育て世代のお話をいただき、他の委員からもこれに通ずるご意見をいただいた。今あるストックを活用していくことや新しいものをつくり出していくことは大事な点で、そうしたことができるまち、さらには、そうしたことを戦略的に行い、変えていくという視点がまちづくりを考えていくうえで重要であると考ええる。

3点目は、まちのポテンシャルの考え方についてである。今回の資料では市民全体的な記述がなされているが、例えば、このまちであったら、こういう住まい方ができ、こういう人たちにとってポテンシャルがあるというような考え方もできればと思う。

最後に、今回、地域拠点や生活地区といった周辺地区の議論が十分できなかったため、次

回は、市民との意見交換会や意見募集の結果をインプットし、議論できればと思う。

委員

本日2名の関係人にご出席いただいているが、関係人の方は、全員で何名いらっしゃるのでしょうか。

事務局

関係人の方は、全員で3名いらっしゃいます。本日は、お一人の方がご都合が合わず、2名のご出席となった。次回は、本日欠席された方にもご出席いただきたいと考えている。

委員

関係人の方へのお願いだが、それぞれ所属されている団体の中でこのグランドデザインについて、議論をしていただけるとありがたい。私もいくつかの団体に所属しており、その団体の中で説明や議論を行っているので、ぜひお願いしたい。

以上